



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

特別なサポートを必要とする児童・生徒に対する学校支援ボランティアに関する調査研究：
教員養成系大学の学生が授業や体験等を通して得た気づきの分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦,巧也, 橋本,創一, 林,安紀子, 池田,一成, 伊藤,良子, 大伴,潔, 菅野,敦, 小林,巖 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108124

特別なサポートを必要とする児童・生徒に対する学校支援ボランティアに関する調査研究

—— 教員養成系大学の学生が授業や体験等を通して得た気づきの分析 ——

三浦 巧也*・橋本 創一*・林 安紀子*・池田 一成*
伊藤 良子*・大伴 潔*・菅野 敦*・小林 巖*

教育実践研究支援センター

(2010年9月27日受理)

1. はじめに

現在、学校教育において、通常の集団への指導に加えて、一人一人の教育的ニーズに合わせた支援を必要とする児童・生徒（以下、特別なサポートを必要とする児童・生徒とする）に対する適切な指導及び必要な支援の充実に向けて、関係者は努力を重ねている。河田ら（2005）¹⁾は、学級経営で教師が抱える問題として、担任をもつと学級経営は担任主導で行われることから、児童生徒にかかわる様々な問題について、他の教師が関わろうとしないケースも少なくなく、担任一人で児童生徒の個々の教育的ニーズに対応していくにはもはや限界があることを示唆している。また、吉岡ら（2008）⁵⁾は、それぞれの現場でできうる限りの対応をとっているのが現状であることを指摘している。困惑した教育現場では、特別なサポートを必要とする児童・生徒への支援は、人的措置がなされないままでは絵に描いた餅であると述べている。

こうした中、児童生徒の個々の教育的ニーズに合わせた支援の充実に向けて、教員養成大学では、教育現場の様々な問題に対応できる実践力を備えた教員を育てていくことが求められている。また、教員養成課程では、昨今教育の質が再検討され始めてきた背景において、学校教育を効率的かつ柔軟なものにするために教職志望の大学生を人材として活用するスクールボランティア（以下、学校支援ボランティアとする）活動が広まっている（武田・村瀬，2009）³⁾。

河田ら（2005）¹⁾では、学校支援ボランティアによ

る個々の対象児の生活課題や学習課題に合わせた支援によって、児童の意欲を高め、適応行動が増加したことを示している。さらには、担任の負担が軽減されたことは、円滑な学級経営に繋がると示唆している。吉岡ら（2010）⁷⁾は、学校支援ボランティアに参加した学生の振り返りをまとめている。実践を通して学んだことは、支援の難しさや自己の未熟さといったマイナス面の印象と、支援者としての自分の成長や将来の教員としてのスキルを向上させることができたなどのプラス面の印象の両方があげられた。このことから、学校支援ボランティアは、学生が理想のみならず、現実を知ることで、教師として自立していくために必要な自分の性質に気づく実践活動であると示唆している。

三浦ら（2007）²⁾は特別なサポートを必要とする児童生徒に対する支援について、子どもとの関わり方を学びたいという能動的で目的の明確な動機は、活動による学びの多さに影響しており、一方で、友達に誘われて参加したという受動的動機は子どもとの関わりからの学びの少なさや、活動へのコミットの度合いの弱さ等に影響している可能性を示唆した。このことから、学校支援ボランティアは、学生の自主性によって成り立っているものの、活動を開始する動機が、その後の学びや気づきに影響しうることが推測された。

以上のことから、学校支援ボランティアは、教育実習以外に学生が教育現場に接する機会が増すという教育的効果を生み、参加した学生は、接した子どもたちの成長をみることで、よりよい教師になるために必要な自己の特性に気づく実践活動であるといえる。

* 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

そこで、本研究では、特別なサポートが必要な児童・生徒や学校支援ボランティアについて、教員養成系大学で初めて学ぶ学生たちが、授業での学びや実際にボランティアを体験することによって、学校支援ボランティア活動に対する印象が変化するという仮説を立て、これらの仮説を検証することを目的とした。

2. 方法

2-1. 対象

東京学芸大学教育学部の学部生を対象とした。本研究では、障害児の発達や教育を授業で初めて学び、大学入学前に障害児に関する専門知識を有していない学生かつ、特別支援教育を専攻としていない学生を採択した（主に大学1年生を対象とした）。

2-2. 手続き

第1回目の講義のオリエンテーション時に、プレテストと位置づけて2010年4月初旬に調査票を学生に配布・回収した。その後、第15回目のまとめとして、2010年7月に再び調査票を学生に配布・回収した。学生には、責任を持った回答を期待するため、調査は記名式とし、個人が特定される形式で実施した。ただし、ローデータ入力段階で、氏名は削除し、個人と回答内容を照合することはないように配慮した。両方の調査に協力した593名（男性307名、女性244名、性別不明42名）の回答を用いて分析を行った（ただし調査項目によって回答数は異なる）。

2-3. 授業の構成

授業の内容は表1の通りである。授業のねらいと目標は、「近年、学校教育においてインクルージョン（共学、共生）という理念が注目され、浸透しはじめている。そのような流れの中で、健常児ばかりでなく、障害児、特別な教育的ニーズをもった子どもについて理解することがすべての教師には求められている。本講義では、学生が様々な障害について幅広く、かつ適切に理解することを目標とする。」とされている。また、授業開始時に、学校支援ボランティアに関するマニュアルブックが配布され、適宜参照するように呼びかけられている。

2-4. 調査内容

調査項目は、フェースシートのほか、特別なサポートを必要とする児童・生徒について、学校支援ボランティアについての項目を、専門家8名によって、独自に作成

した（選択式・自由記述式の項目を含む）。

3. 結果

3-1. 教員志望について

「とてもそう思う」と回答したのは、244名（41.1%）であり、「だいたいそう思う」と回答したのは、169名（28.5%）であった。このことから、本研究の対象である大学生の7割近くの学生が、将来教員を志望していることが明らかとなった（表2参照）。

表1. 授業「障害児の発達と教育」のシラバス

1	オリエンテーション
2	障害者の理解とその支援
3	特別支援教育のシステム
4	視覚障害の心理・行動特性と支援
5	聴覚障害の心理・行動特性と支援
6	運動・重度重複障害の心理・行動特性と支援
7	言語障害の心理・行動特性と支援
8	病弱・身体虚弱の心理・行動特性と支援
9	知的障害の心理・行動特性と支援
10	広汎性発達障害（自閉性障害）の心理・行動特性と支援
11	学習障害の心理・行動特性と支援
12	注意欠陥・多動性障害の心理・行動特性と支援
13	早期発達支援と障害児保育
14	障害者福祉システム
15	まとめ

表2. 教員志望について (n=593)

とてもそう思う	41.1%
だいたいそう思う	28.5%
よく分からない	12.3%
あまりそう思わない	11.6%
全くそう思わない	5.4%

3-2. これまでの学校生活における特別支援学級の有無と、特別支援学級に在籍する児童生徒と一緒に活動した経験の有無について

「特別支援教室が設置されていた」と回答したのは、279名（47.4%）であり、その内「一緒に活動をした経験がある」と回答したのは、210名（35.7%）であった。このことから、本研究の対象である大学生の5割近くの学生が、特別支援教室の存在を認知しており、その内の3割以上の学生が、実際に特別支援学級に在籍する児童生徒と共に活動を行った経験があることが明らかとなった（表3参照）。

表3. 特別支援学級の有無と、在籍児童生徒と一緒に活動した経験の有無について (n=593)

		特別支援学級の有無		
		有 (交流有)	有 (交流無)	無
一緒に活動した 経験の有無	有	35.7%	11.7%	9.9%
	無	5.6%	11.4%	15.1%

3-3. 過去のボランティア経験の有無と、大学入学直後の学校支援ボランティア活動の参加希望との関係性について

過去のボランティア経験がない学生が、大学入学後に学校支援ボランティアの活動に興味を示しているものの、何らかの不安があると回答した学生が最も多かった(199名, 33.8%)。その内、これまでにボランティア経験はなかったも興味があったと回答したのは、100名(17.0%)であった。また、過去のボランティア経験があり、学校支援ボランティアを希望している学生は、19名(3.3%)であった。このことから、本研究の対象である大学生の3割以上の学生は、ボランティア活動が未経験であることから、学校支援ボランティア興味を示すものの、不安を感じていることが示唆された。また、過去にボランティア経験がある学生の割合は少なく、今後学校支援ボランティア活動を積極的に希望する学生も少ないことが推測された(表4参照)。

表4. 過去の経験の有無と入学直後の活動参加希望について (n=593)

		過去のボランティア経験の有無			
		有 (志望)	有 (実習)	無 (興味有)	無
学校支援ボ ランティア希 望	希望有	0.7%	2.6%	9.2%	1.9%
	興味有 (不安)	1.5%	5.8%	17.0%	16.8%
	興味有 (余裕無)	0.9%	3.2%	10.4%	11.7%
	興味無	0.3%	0.3%	0.7%	8.2%

3-4. 入学直後と受講後の学校支援ボランティア活動の参加希望の関係性について

入学直後と受講後における学校支援ボランティア活動の参加について、両方とも「興味はあるが不安」と回答したのが、108名(19.1%)と最も多かった。次いで、両方とも「興味はあるが余裕がない」と回答した

のが、96名(17.0%)であった。このことから、本研究の対象である大学生は、入学直後において、学校支援ボランティア活動に興味を示すが、講義を受けた後も、何らかの不安があるため、参加するに至らない学生が2割近くいることが明らかとなった(表5参照)。

表5. 入学直後と受講後の活動希望の関係性について (n=593)

		受講前の希望			
		希望有	興味有 (不安)	興味有 (余裕無)	興味無
受講後の希望	受講中に活動開始	0.7%	0.7%	0.9%	0.2%
	希望有	5.5%	4.9%	1.6%	0.2%
	興味有 (不安)	4.1%	19.1%	6.7%	2.1%
	興味有 (余裕無)	4.1%	16.6%	17.0%	4.2%
	興味無	0.0%	0.9%	0.4%	2.5%

3-5. 受講後の学校支援ボランティア活動参加に対する不安の変化について

入学直後と受講後における学校支援ボランティア活動の参加に対する不安について、「何らかの変化があった」と回答したのは、239名(40.3%)であった。「変化はなかった」と回答したのは、216名(36.9%)であった。「変化があった」と回答した学生の理由について自由記述を整理すると、漠然としていた不安が、様々な障害の特性を知ることで、不安が和らいだ等の意見をまとめた「不安が軽減した」というタイプが、56名(24.0%)であった。知識は得たが、実際に障害児にどのように接すればよいかという不安が高まった等の意見をまとめた「新たな不安が生じた」というタイプが、82名(35.2%)抽出された。次に、これらの2つのタイプについて、授業の理解度や、学生支援ボランティアが教職に役立つかという質問との関係性をまとめた(表6参照)。

授業に関する理解度が70%以上の学生(53名, 23.1%)と、学校支援ボランティアが将来教職に就いた時に役立つと回答した学生(82名, 35.8%)が、障害児との実際の接し方に不安を抱えている割合が高いことが示された。

このことから、授業により理解を示す学生や、学校支援ボランティアが将来志望する教員の仕事に役立つとより考える学生ほど、障害に関する知識を得たことによる不安の軽減だけではなく、具体的な障害児に対

する接し方等の実践的な活動についての不安を抱く傾向があることが示された。

表6. 受講後の活動参加に対する不安の変化について (n=239)

		不安の変化	
		不安軽減タイプ	新たな不安発生タイプ
理解度	70%以上	15.7%	23.1%
	30%以上70%未満	8.7%	12.7%
教職に役立つと思う	とてもそう思う	15.3%	26.6%
	だいたいそう思う	8.3%	9.2%
	よく分からない	0.4%	0.0%

3-6. 受講中に学校支援ボランティア活動を始めた学生の様相について

受講中に、学校支援ボランティアに参加した学生は、14名(2.4%)であった。授業を通して、彼らが特別なサポートが必要な児童・生徒や、学校支援ボランティア等について抱いた印象の変化についてまとめてみた(表7参照)。

特別なサポートが必要な児童・生徒についてのイメージの変化について、「あった」と回答した学生(64.3%)が最も多いことが明らかとなった。イメージの変化に関する自由記述を整理すると、様々な障害の特性を知ることができた等の意見をまとめた「障害理解の大切さ」(50.0%)と、障害児と接する際に抱いていた怖さが減少した等の意見をまとめた「怖さの軽減」(14.3%)の2つのカテゴリーに分類された。

特別なサポートが必要な児童・生徒への支援に関するイメージの変化では、一人一人の障害特性に合わせた支援を行うことが大事である等の意見をまとめた「一人一人のニーズに合わせたサポート」(28.6%)と、通級学級などの利用が効果的である等の意見をまとめた「支援体制」(14.3%)、その他(14.3%)の3つのカテゴリーに分類された。

学校支援ボランティアに関するイメージの変化では、全体では「なかった」(45.1%)が多かったが、講義中に活動を始めた学生においては、「あった」と回答した学生のほうが多くみられた(50.0%)。実際の経験を通して、改めて支援の難しさを痛感した等の意見をまとめた「実際の経験を通して支援の大変さを実感した」(28.6%)と、その他(21.4%)の2つのカテゴリーに分類された(表8参照)。また、学校支援ボランティアに関するマニュアルブックについて、受講中に活動に参加した学生は、全体よりも「利用した」割

合(50.0%)が高いことが示された(表9参照)。

このことから、受講中に学校支援ボランティア活動に参加した学生は、特別なサポートを必要とする児童・生徒について、実際の活動を通して感じた、支援の難しさに直面したことや、様々な障害の特性を理解することの大切さに関する気づきを得たことが、学生全体よりもイメージに変化をもたらしたと推測された。また、マニュアルブックの利用の割合が高かったことは、より積極的に活動に望む姿勢が反映されていると示唆された。

表7. 印象の変化について

	全体		講義中に活動を行った学生	
	あった	なかった	あった	なかった
特別なサポートが必要な児童・生徒の印象の変化	54.8%	30.0%	64.3%	28.6%
特別なサポートが必要な児童・生徒に対する支援の印象の変化	48.2%	34.1%	57.1%	42.9%
学校支援ボランティアの印象の変化	14.1%	45.1%	50.0%	35.7%

表8. メージの変化に関する自由記述

特別なサポートが必要な児童・生徒の印象の変化	障害理解の大切さ	50.0%
	怖さの軽減	14.3%
特別なサポートが必要な児童・生徒に対する支援の印象の変化	一人一人のニーズに合わせたサポート	28.6%
	支援体制	14.3%
	その他	14.3%
学校支援ボランティアの印象の変化	実際の経験を通して支援の大変さを実感した	28.6%
	その他	21.4%

表9. マニュアルの利用について

	全体		講義中に活動を行った学生	
	利用有	利用無	利用有	利用無
受講中の学校支援ボランティアマニュアルの利用	23.9%	74.5%	50.0%	50.0%

4. 考察

本研究では、入学直後に学校支援ボランティアに参加したいと志望する学生は少なく、興味を示す学生はいるものの、何らかの不安を感じて活動に参加していない学生が多く存在することが示された。何らかの不安については、学校支援ボランティア活動に関する不安の変化であげられた、障害特性に関する知識が一つの要因であると推測される。また、講義後の調査においても、何らかの不安があることで参加をためらう学生の存在が確認された。彼らの不安の一つには、障害についての一般的な知識を、実践の場でどのように生かしていけばよいのかといった、新たな不安が生じたことが要因として考えられる。このことは、受講中に学校支援ボランティアの活動に参加した学生が抱いた、活動に関するイメージの変化にも現れている。

学校支援ボランティアに対して興味はあるものの、余裕がないと回答した学生も、少なくない。本研究の対象者は、大学1年生が大半であることから、時間的な余裕そのものが得られにくいことが要因の一つであると考えられる。近年では、学校支援ボランティアが、単位認定される大学も増えてきていると聞く。学校支援ボランティアは、学生に対する教育的効果だけではなく、大学の地域貢献にも繋がる活動である(武田・村瀬, 2009)³⁾ため、今後は、全ての専攻の学生を対象とした取り組みが、どの学年でも単位として認定されるカリキュラムが作成されることが望まれる。

受講中に学校支援ボランティア活動に参加した学生は、実際の活動を通して、これまで障害児に関わる際に抱いていた、怖さや緊張感を軽減することができ、また、支援の難しさを痛感した。だからこそ、より障害の特性を把握することの大切さや、一人一人のニーズに合わせた支援の重要性を、イメージの変化として捉えたのだと推察される。また、彼らの半数が、学校支援ボランティアのマニュアルブックを利用していたことから、より障害児への理解に努めようとする姿勢が伺える。

以上のことから、本研究における、学校支援ボランティアについて、授業での学びや実際にボランティアを体験することによって、学校支援ボランティア活動に対する印象が変化するという仮説は示唆された。今後の課題として、受講後に、「興味はあるものの不安がある」と回答した学生には、特別なサポートを必要とする児童・生徒への具体的な支援に対する不安が一つの要因としてあげられる。そのため、支援方法に関する授業の充実や、活動中に大学教員や専門家から、

アドバイス等が得られるプログラムを構築していくことが望まれる。また、本研究では、回答した全学生の自由記述を分析するには至らなかった。今後は、自由記述について更なる分析を行い、より学生の現状や課題を把握していくことが急務であろう。

謝辞

本研究は、東京学芸大学教育学部授業「障害児の発達と教育」(平成22年度前期)において実施した研究をまとめたものである。調査にご協力していただいた学生の皆様、ならびにデータ解析にご協力いただいた大澤優子さん(東京学芸大学)に深謝いたします。

5. 参考文献

- 1) 河田将一・岩山祐子・富永鈴子・一門恵子(2005) 学生ボランティアによる多様な障害のある児童の在籍する小学校特殊学級における支援 九州ルーテル学院大学紀要32 pp63-72.
- 2) 三浦巧也・藤野博・濱田豊彦・澤隆史・小笠原恵・奥住秀之・小池敏英・国分充(2007) 地域の障害児支援活動に参加する学生の意識調査 日本特殊教育学会第45回大会論文集 pp195.
- 3) 武田明典・公胤(2009) 日本における大学生スクールボランティアの動向と課題 神田外語大学紀要21 pp309-330.
- 4) 田中敦士・神園幸郎・緒方茂樹・大沼直樹・片岡美華・雲井未敏・内田芳夫(2009) 特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の学習意欲と技能習得の実態 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要10 pp31-40.
- 5) 吉岡恒生・柴田和美・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・山内麻美(2008) 発達障害児のための学校支援ボランティア事業 愛知教育大学研究報告57 pp111-119.
- 6) 吉岡恒生・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・山内麻美(2009) 発達障害児のための学校支援ボランティア事業(2) 愛知教育大学研究報告58 pp153-161.
- 7) 吉岡恒生・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・村松麻美(2010) 発達障害児のための学校支援ボランティア事業(3) 愛知教育大学研究報告59 pp29-37.